



北京語言大学 日本語学科学生
私にとって友愛とは

2019年版

公益財団法人 友愛 編

公益財団法人友愛 主催 小論文コンテスト

私にとって友愛とは

2019年 北京語言大学版 文集

∞∞∞ 目次 ∞∞∞

第一位	任耐安	1
第二位	劉品原	3
第二位	楊中奕	5
第三位	李 穎	7
第三位	漆晓艳	9
第三位	梁 冉	11
第三位	連傑婕	13
入 選	張一帆	15
入 選	吳詩祺	16
入 選	任方適	18
入 選	吳誠卿	19
入 選	马依然	21
入 選	楊皓月	23
入 選	王馨玮	24
入 選	李童一心	26
	李芋婷	28
	金詩桐	29
	邵飞琼	31
	周心伊	32
	沈思遠	34
	王婧怡	35
	婁 洋	37
	吳雪婷	38
	李 睿	39
	李金晟	41
	索朗央宗	43
	吳煜昊	44
	張夢晗	46
	姜昊越	48
	陶逸朋	49
	王紫菡	50

花々に込められた友愛

任耐安（3年生）

寮から講演会の会場へ行く途中で、学校の小さな花壇の中に、オウバイが咲いているのに気づいた。寒い風に立ち向かいながら、黄色い花はそれぞれ胸を張って空へ向かっていくように咲き誇っている。この早春の季節に、控えめにもそれぞれに美しく咲く花々を見ると、私たち人間の「友愛」もこのような花々のようであってほしいと願わずにはいられない。

実際に鳩山先生のお話を聞かせていただき、つくづく共感を覚えた。言い換えれば、「友愛」とは中国語で言う「大同」である。「大同」とは、公平で、自由で、平和である理想的な社会を意味する。人間の社会をこの種の「大同」に導くためには、他人を尊重するとともに、自己を尊ぶことが大切だと私は考えている。まず、自分の価値を見出し、それを認めることで、初めて他人を理解し、認めることができるのではないだろうか。そして、他人の考え方へ敬意を払うことでお互いに信頼できるようになるのではないか。

日本に留学している間に、世界各国からの留学生と一緒に暮らすことによって、人間は予想以上に違っていることに気がついた。違う文化圏に生まれ育った人はもちろん、たとえ同じ国、同じ地域、同じ家庭の中でも、人はそれぞれ違うのだ。そして、違いは見た目、母語や言葉の使い方などの表面的なことに限らず、価値観、道徳的観念、信条など内面的、精神的な方面にまで及ぶ。

残念ながら、人間には他人は自分と同じだ、または、他人が自分と同じであってほしいと願う傾向がある。個人間の人間関係の場合、このような思いが常に人間関係を悪化させる。例えば、いつも理解してくれる友が、ある点について自分をわかってくれなかったら、怒りを抑えきれず相手に不信感や嫌悪感を覚えてしまうかもしれない。一方、それが国家の場合、このような思いが歴史的な悲劇をもたらしか

ねないのだ。一旦相手国の行動を納得できなかつたら、もはや交渉する余地さえなくなり、武力だけに訴えてしまう事件は歴史上たくさんあったのである。例の一つとして、第二次世界大戦の中にユダヤ人に対する残忍な虐殺が挙げられる。

このような悪循環から脱出するためには、鳩山先生が説かれた「友愛」の精神が鍵になるのではないかと思う。自身と他人の間に大きな違いがあると認識した上で、自身を尊重しつつ、他人の違う点を認め、敬意を払うこと。もし一人ひとりがこのような友愛の精神を実践できたら、世界はどれほど平和になるだろう。

会場からの帰りに、もう一度オウバイの木に近づいて花々をじっと見つめると、蕾の花、咲き始めの花、満開の花、同じ木に生えながらも、それぞれの花は誇らしげにそれぞれの違った姿を人たちに見せていた。他の花と競い合うこともなく、一生懸命にそれぞれが最善を尽くしていた。「友愛」とはまさにこれらの花の姿、そのものではないだろうか。

私にとって友愛とは

劉品原（4年生）

「友愛」、この言葉は私たち日本語学習者にとって決して難しいものではない。しかし、試験で正しく書けるだけで身についたとは言えるだろうか。

私はこれまでは、友愛の意味を真剣に考えずに、曖昧にとらえたままで人々と付き合ってきた。外国の人々、特に日本人という時は、「文化や言葉が違うから、熱い感情をいっぱい出して付き合えばいいのではないか」というような気持ちでやってきたが、やはりちゃんと分かり合えなくて寂しくなる時はあった。

今年の三月に、日本友愛協会の鳩山先生と川手先生の素晴らしいご講演を伺いことができた。「自立と共生」、この二つの言葉に私は強烈に共感して、それをきっかけに、「友愛」という言葉の意味を考え直した。

今の私からみればまず、友愛を貫きたい人間は強い包容力を持たなければならない。それは「共生」の秘訣だ。決して子供のように、一緒に遊ぶのは自分と同じ興味を持つ人だけで、自分と異なる子はグループから孤立させるのではない。日本友愛協会の「友愛三原則」——「相互尊重、相互理解、相互扶助」が表している如く、「相互」は不可欠なものだ。自分、または自分と同じ立場にいる者、同じ利益を求める者が幸せであれば他人の気持ちはどうでもよくなるなんてことは決して友愛ではない。自分と異なるものも受け入れて、共生を求めることこそが友愛の表しだと信じている。

寮のトイレには夏になるとちっちゃい虫が集まってくる。殺虫スプレーで殺しても、少し時間が経ったらまた集まってきてしまう。生命力は驚くほど強い。実はその虫は人を刺さない。ずっとトイレの中で飛び回るからうるさく感じるだけだ。刺されないなら殺さなくてもいいのではないかと、私は思った。それからは、トイレに入るたび

にただ手を振って、虫たちを上の方に行かせるだけで、殺すことはなかった。笑われるかもしれないが、それも友愛の一種なのではないか。

それから、友愛を貫くためにもう一つ大事なのは、自分を失わないこと、つまり「自立」することだと思う。

私は一年間、東京に留学に行ったことがある。その時の私は、「せっかくの機会だから、日本人の友達をいっぱい作りたい」と思って、音楽サークルに入った。そこにいた人の99%は日本人で、留学生は二、三人しかいなかった。みんなと仲良くなるために、私は日本人の真似をしていた。飲食も服も、コミュニケーションの取る方なども頑張ってみて見習っていた。友達が「劉は日本人だと言っても全然違和感ない」と言ってくれた時、私はそれを褒め言葉として受け入れて、うれしかった。自分の努力が認められたような感じだった。

しかし、私はどう頑張っても日本人にはなれない、文化や習慣のギャップは埋められないのだった。その残酷な事実気付いたら、友達を作る努力は逆につらいものとなってしまった。私は反省した。そうだ。他の誰かになることはできない、必要もないのだ。自分の立場を意識して、それを受け入れてからこそ、人と平等に付き合うことができ、その付き合いから幸せが感じられるのだ。本当の自分を受け入れることさえできなかつたら、他の人を受け入れることもできないと思う。

「自立と共生」、そのどちらも友愛を貫くために不可欠なものだと思う。私にとって友愛とは、強い包容力で客観的な相違を認めて、自分も他人も人として平等に受け入れることだ。家族といい、国といい、友愛の精神を考え理解して実践に移すことで人々が幸せになると信じている。

私にとって友愛とは

楊中奕（3年生）

ハクモクレンが羽を広げた白い鳥のように咲く頃、鳩山先生に北京語言大学に来ていただき、「友愛」についてのお話を初めて伺った。

「汝の隣人を愛せよ」。「共生」は、他人への尊重と無差別な愛である一方、私は「汝を愛せよ」という言葉を耳にしたことがなかったし、どうして自分自身への尊重と愛も必要なのか、さっぱりわからなかった。しかし鳩山先生の話聞いて初めて、私は「個」について真剣に考え始め、それに対する理解が深まった。

自分を尊重する「自立」の愛というものは、自分の欲望を満たすためにお金や名誉にすぎり、浅いところで自分を満足させる、エゴの「自己愛」ではないのだ。本物の「自立」の愛は、「自己完成」を義務に、それを実現させるために、自分自身が最も美しい人間性を身につけることなのである。こうして他人への愛も「個」の確立の過程から生じ、「友愛」が結実する。

その「友愛」を持って、「お互いを愛することができるのなら諍いがなくなる」と鳩山先生は説いた。

「愛」という言葉を聞いて、ふとインドネシアの小学校でボランティアをしていた時のことを思い出した。NGOの運営を手伝う現地の大学生、Lは、私にあるスピーチの動画を見せながら、「教育は愛を広げる、そして世界を変えるんだ」「子供たちに愛を教えたい」と、とにかく「love means everything」と感情を高ぶらせて語っていた。あの時の私は、このあまりにも熱血すぎる青年のことを、ただ可笑しいほど単純な考えを持った人だと思った。

しかし、2年後の現在、鳩山先生の「友愛は毎日実践すること」という言葉を聞いて、Lの声がどことなく響いている気がする。我々人間は支え合いながら生きてきたのだ。ヘレン・ケラーが言った「人が互いの幸福に責任を感じるようになれば世界は変わらない」

という言葉のように、世界中の人々は人間性を高め、お互いを思いやり、愛するものだ。

国家間も同じである。環境への配慮を怠った開発により引き起こされた環境・エネルギー問題の深刻化は、一国、または先進国だけの責任ではなく、世界は助け合っている一つの社会生命として、全人類の生存のために、気合を入れて取り組んで行くべきである。

北京語言大学の学生である私たちは「友愛」を実践するための、国境を越えることなく、心を通じ合わせることができるツールである「言語力」を持っている。そのツールによって様々な人間と出会って話し合え、「自立」の上で、違う習慣、違う宗教の外国人留学生とお互いを受け入れ、「共生」していく。

ノーベル平和賞を受賞した元コスタリカ大統領のオスカル・サンチェスは「平和とは終わることのない過程であり、生き方であり、紛争を解決するひとつの方法である。その努力に終わりはない」と言った。

「友愛」も同じだ。まず自分自身を愛する。そして家族を、コミュニティを、世界を愛する。その努力に終わりはない。

私にとって友愛とは

李穎（3年生）

先日鳩山由紀夫先生の友愛に関する講演を聞くまでは、もし「友愛とは何か」と聞かれたら、頭の中にすぐ孔子の「仁」の思想と墨子の「兼愛」の思想が浮かんで、恐らく知らない人でも「わが友だ」という気持ちで相手を愛するということくらいは答えられただろう。しかし、この春が来る季節に、鳩山由紀夫先生の友愛に関する講演を聞いて、更に別の角度から友愛を認識した。

鳩山由紀夫先生の話によると、友愛はお互いに尊重し理解し、心を通じ合わせて相手を愛するというだけでなく、人間と環境の関係に対しても友愛の態度が必要とのことである。すなわち、友愛は人と人の共存だけでなく、人と環境の共存も含まれている。確かにその通りだと考えている。地球温暖化や砂漠化などの大きな環境問題ともかく、小さな環境問題は実に私たちのそばで毎日起こっているのではないだろうか。

子供の頃の私にとっては故郷である煙台の海は最も美しいものだったが、高校卒業後、大学進学前にもう一度見に行くと海の色はすでに記憶の中のきれいな青ではなかった。人間が海にごみを捨てたことにより、最初はただ海水の色が濁り、多くの泡が出て来るといった環境からの小さな報復を受けた。その後海に依存している人々が漁獲量が大幅に減少するという報復を更に受けた時、ようやく環境との調和の重要性を認識した。人間同士がお互いに理解し合えないと戦争が起きかねないということは知られているが、人間と環境が調和しないと環境が報復をするかもしれないということは見落としがちだと考える。いや、環境からの報復は敵からの攻撃のように激しくないために人間は常に知らないふりをしているのではないだろうか。しかし、環境との関係を改善するために、また大量の人力と資金などを投入しなければならない。最近あるニュースによると、私の故郷であ

る煙台も海などの水汚染を解決するために「三年計画」を実施し、約43.2億元（約720億円）の巨額な費用がかかるそうだ。このような環境を破壊した後また大きな代価を払うということは、現在経済の発展が重要になっている中国に対して、特に不利だと考える。こうしてみると鳩山由紀夫先生がおっしゃった人間と環境の共存という友愛がさらに大切だと言えるだろう。

そして、鳩山由紀夫先生が講演した友愛の理念の中で、もう一つ印象深かったのは友愛を通じて地域と地域の対立を無くすということである。鳩山先生は人々はお互いに理解し、人と人の心をつなげて、いつか地域と地域の対立も無くすことができるだろうと信じている。先生の話聞いて、その平和に対する熱い思いと希望を強く感じた。現に日中関係は徐々に良い方向へ進んで、私たち日本語学習者にとっては、本当に良い時期だと考える。鳩山由紀夫先生の講演を聞いた後、日中関係をより一層よくするために努力するという考えがより固まった。

一人の人間として、他人と共存し、環境と共存する。そして日本語を学ぶ者として、日本語で日中両国をつなげる橋を築く。これらは全て鳩山由紀夫先生の友愛理念から心得たものだ。今故郷の皆は環境と共存するために頑張っているのだから、私も自分の将来と日中友好のために、努力しなければならないと思う。

私にとって友愛とは

漆晓艳（4年生）

卒業際、川手正一郎先生と鳩山由紀夫先生の素晴らしいご講演を聞くことができ、非常に嬉しくてたまらない。先生方は友愛をめぐって、例を挙げながら、いろいろお話をしてくださった。一番印象に残ったのはやはり鳩山先生が強調した「友愛理念」だ。これがきっかけで、私は「友愛」という言葉を考え直してみた。

さて、友愛とはなにか。幼い頃からずっと両親や先生に教わってきた人間の基本的な素養の一つとして、「友愛」は割と馴染みのある言葉と言える。文字通りに「友になれるように他人を優しく親切に扱うこと」という風に理解してきたが、これは鳩山先生が唱えている「友愛」とは違うのだとつくづく感じた。先生は「仁」と「恕」を用いて、友愛理念を解釈してくれた。「仁」は他人に譲る、謙譲の美德を指す一方で、「恕」は「己の欲せざる所を人に施す勿れ」、つまり、自分が嫌だと思ふことは人にもやってはいけないと意味している。これを聞いた途端、他人と礼儀正しく付き合い、ひどい目に遭った友達を助けるなどすると普段自分が考えている友愛はそのほんの少しの表面に過ぎないことが分かった。本当の友愛は寛容の心を持って、心の底から人を愛することなのである。

私は日本での留学生生活を振り返ってみたら、温かさに囲まれている感じが湧いてきて、幸せでたまらなくなる。バイト先の店長、部活の友達、授業のクラスメート等…みんなが心の底から私を一外国人として愛してくれたからこそ、私が異国にいても、家族と離れても、寂しいことなく、温かく感じられたのだ。周りのみんなは正に友愛の精神を実践している。

更に、友愛精神はもっと広い舞台に置くべきだと考える。人間は人間に対し友愛精神が必要であると同じように、自然に対し、国に対し、社会に対してでも同じことが言えるだろう。経済社会が急速的に発

展する一方で、自然界は逆に悪化している。空気が悪い、水が臭い、青空が青くない、これらは全部我々人間が大自然に対し、友愛精神を施していないからである。今後、自然を目標達成の手段としなく、人間と平等的な存在と見なし、植林活動などに参加することによって、心の底から大自然を愛し、自然界を守っていこう。

それから、国と国の間でも友愛精神を実践したらどうだろう。一方の強化は一方の弱化と絶対にイコールではない。他国の発展を恐れて、妨げたりすることは国際競争によく見られる。しかし、これは果たして自国の利になるのかを疑問に思う。心から友愛精神を貫き、お互いに協力し合い、肩を並べて歩いてはじめて、より輝かしい未来を迎えられるのだ。

「友愛」はたった一つの言葉だが、千金に値する。私も今後、世界中が友愛精神に囲まれるように、人に対しても、自然に対しても、友愛精神を広めていきたいと思う。

友愛から考えること

梁冉（4年生）

「私は友愛大学に入学したばかりです。」先日、鳩山由紀夫先生は講演の初めに、そう言った。長年に渡り友愛精神を発揚し、また日中友好のために励んで取り組んでいる先生の謙虚さに敬服する一方で、「友愛」の言葉について様々な感想も出るようになった。

先日、ニュージーランドのクライストチャーチでイスラム教の二つの礼拝所で銃乱射事件が起きた。調査によると、この惨劇が起きた原因は当地に住んでいるテロリストがイスラム教への憎悪によるものだった。今回の事件もまた最近頻繁に起こるテロの一つであろうと昔の私はきっとそう思ったに違いない。しかし、講演を聞いた後、この事件が発生した根本的な原因を深く考えた。テロリストは自分と異なる宗教や文化を尊重することができない上に、包容力が極めて欠けるのだ。それは、まさに先生がおっしゃったような「仁」と「恕」の友愛精神の欠如に合致するのだと考え出した。「仁」がないため、大らかな人間になれない。「恕」がないため、他人の身になって物事を考えず、自分と異なるものに対して認めることができなく、却って破壊する気持ちになりがちである。

もっと深く考えてみると、友愛精神の欠如が深刻な問題になると、世界はどのような模様になるのか。それは、人と人との間は無関心で自己本位になる冷たい世界である。それは、お互いに宗教や文化のわだかまりがあるので上述の事件のようにテロが多発する世界である。それは、国と国の間に異文化交流を納得できず、さらに相違的な部分を取り除くために絶えず戦争があふれる世界である。それは、どれほど恐ろしい世界だろう。

そのような世界に「ノー」と言い、友愛精神を発揚するために、私たち一人一人の力が必ずしも小さいものではなく、むしろ友愛の世界に行き渡る道の大事な礎石であると思う。「人があくまでの目的で

す」と鳩山先生の声が耳元に響いている。とりわけに、一帯一路の建築からアジア共同体構想の打ち出しまで、国家的にレベルで友愛精神に合致する政策も多くなり、異文化交流や多国間友好事業に取り組むチャンスが満ちている。この時代に置き、私たちのできることが想像以上に数多くあるのだ。私自身を例とすると、日本語を専門として勉強している私は去年8月、内モンゴルの庫布齊（クブキ）砂漠に行って、中日友好交流をテーマとする植林活動に参加した。国籍が違っても、文化が違っても、ひいてはお互いに言語が分からなくても、笑顔で目を合わせ、互いに合力で幼い木の苗を荒れた砂漠に植えている皆の姿に極めて感動した。その時、私が身をもって友愛の強い力を実感した。

些細な力でも、友愛の巨輪に加わることができる。今から友愛の種を撒こうと、いつか「平和・安定」と名乗る森が世界の至る所に植えられると期待し、またその日がきっと来ると固く信じている。

私にとって友愛とは

連傑婕（3年生）

先日、鳩山由紀夫先生の友愛についての講演を拝聴し、「友愛」に対する理解を深められ、友愛の重要性をさらに理解することができ、非常にありがたく思う。鳩山由紀夫先生によると、友愛協会の行動指針、いわゆる「友愛3原則」というのは「相互尊重、相互理解、相互扶助」である。その友愛3原則のもとに、友愛を具体的に行動で表現する。この講演を聞いたことをきっかけに、友愛を様々な角度から見るができるようになった。私は友愛という精神が人と人の間で表現できることはいうまでもなく、国家と国家の間、人と自然環境にも関係があると思う。

古代中国の思想家である墨子は「兼愛」を唱えた。「兼愛」とは、人々を平等に愛することである。友愛3原則の「相互尊重」と「相互理解」とほとんど同じ意味を持っている。「兼愛」は中国人にとってほとんどの人が知っている言葉だが、これをきちんと覚え、実際自らの生活で表現しているのだろうか。恥ずかしいことに、以前の私にはできなかった。なぜかというと、「〇〇ちゃんは成績が優秀だし、優しく親切だし、いい子だね。彼女ともっと遊びなさいね。」と、小さい頃に私は親からそう言われたことがある。友達に聞いてみると、同じ経験がある人は少なくない。「朱に交われば赤くなる」という諺のように親の気持ちはわかるが、これは正しいのかと、私は自問し続けてきた。一つのことだけを基準として一人の人間を判断してはならないのではないだろうか。例を挙げると、数学が苦手だが、体育が得意な佐藤さんと、数学が得意だが、体育に自信がない鈴木さんは、どちらの方がいいのだろうか。以前の私は佐藤さんだと答えたかもしれないが、今の私から見ると、どちらも素晴らしい人だと思う。どのようなことでもできる完璧な人間はいないとは言えないが、人間というものは、もともとそれぞれに特徴があるはずだ。人々の間に違い

があるこそ、その違うところが素敵である。しかし、歴史を紐解けば明らかのように、世界中に人種などの違いによる問題が少なくない。先日、『グリーンブック』という映画を観賞し、黒人が想像できないほど差別されていたことを実感した。そのため、さらに友愛の重要性をしみじみと感じた。

また、講演の中で最も印象深かったのは、友愛の基本は自己完成である。まず自分のことをコントロールし、自分を尊重してから他人を愛することを目指す。元気、やる気、本気を出し、一生懸命自分の夢に向かって努力する。自立した上で、他人を尊重し、手助けする。日常生活の中に、たとえほんの小さなことに過ぎないとしても、他人を手助けすると幸せを感じられるだろう。

さらに、友愛は国家と国家の間においても重要なことである。歴史の暗い影から抜け出し、中国と日本の国民がお互いに信頼し、尊重し、日中関係が平和と友好に発展してほしいと思う。一帯一路政策を通じ、中国は関係各国と睦まじく信頼し合い、知恵を出し合い、国と国の境をなくすことができる。今日複雑に変化している国際情勢の下で、国と国にウィンウィンの関係を実現させるためには、他国の利益をまず尊重することが必要である。

古代シルクロードは一貫した友愛精神の象徴であった。その友愛精神を継承しつつ、今日の一帯一路政策は世界の平和と発展に貢献できるのではないだろうか。

最後に、友愛は環境問題にまで広がる。友愛協会のパンフレットによると、中国では植林活動を行っている。一つ一つの木を植え、何十年、何百年後に森になり、友愛の精神も続けていくことが出来ると言えるのではないだろうか。

鳩山由紀夫先生の講演を聞いて友愛に対する理解を深めた。これから私は自立し、毎日自分の行動を通じ、他人に友愛の精神を伝えたいと思っている。

「恕」で「友愛」を続ける

張一帆（4年生）

「友愛」という言葉は一体何を意味しているか。先日、鳩山先生のスピーチを聞いて、より深く理解した。

鳩山先生の話によると、「友愛」に対して「仁」と「恕」は肝心だ。「仁」は「親切」を意味しており、他人に対する労りの心を指している。「恕」は「同情」の意味で、他人の立場になって考え、自分との相違点を認めることを指している。しかし、「友愛」精神の実現のためには、「仁」より「恕」のほうが重要だと思う。

鳩山先生のスピーチを聞いている時、周恩来総理が1955年にアジアアフリカ会議で打ち出した「小異を残して、大同につく」という精神を思い出した。これは鳩山先生が言った「友愛」精神と大体同じことを指していると思う。「小異を残して、大同につく」というのは、同じ目標を求め、違うところに対して互いに理解して尊重するということではないか。鳩山先生が言った「恕」は自分と違う物に対して尊敬を持ち、認めていくという気持ちで、「小異を残す」の意味と似ていると思う。違うところがなくなるべきだとしつこく思い込むより、心から受け入れるのがもっと大切だと思う。相違を認めてからこそ、精一杯次の協力に力を尽くすのだ。つまり、「恕」のほうが重要なのである。

そして、私から見れば、「恕」の実現には「交流」がなくてはならないものだ。交流があるからこそ、互いの違うところを真剣に認めていく力を持つようになる。互いの相違を認めていけるからこそ、「恕」の精神を本当に理解できるようになる。

もちろん、政府間の外交活動などはとても重要だが、民間における交流も必要だと思う。なぜかというところ、日中両国の国民に対して、様々な交流で互いの違う文化や習慣、価値観などを理解できるようになるからだ。例えば、日本友愛協会による中国における植林活動や、

中国日本友好協会、中国日本商会及び日中経済協会による毎年二回の中国大学生訪日活動などが定期的に行われている。現在このような交流活動が多くなり、日中両国の「友愛」精神の実現において欠かせない役割を担っていると考える。

だから、日中の友愛を続けるには、日中両国はこのような民間における交流に努めなければならないと思う。さらに、文化や社会などに関わる交流活動だけではなく、様々なメディアによる日常生活における情報の交流をも重視しなければならない。

日中両国のメディアが客観的に互いの国のことを報じるべきだと思う。メディアは人が自分の知らない世界と接する主な架け橋となるからだ。鳩山先生が言った通り、政治離れの立場から事実を報道し、国内の人に誤解を与えないように頑張るのは、すべてのメディアにとって大事なことだ。

日中両国は一衣帯水の隣国で、互いに積極的な交流で相互理解を求めるべきだと思う。「仁」を持ちながら、「恕」の精神で互いの国の相違を認め、理解して尊重するのは日中両国の「友愛」を維持する鍵だと思う。

私にとって友愛とは

呉詩祺（2年生）

友愛とは、いったい何なのか。最初はぼんやりとした印象しか持っておらず、友愛はただ親切に人に接することであり、それ以上はないと思っていた。しかし先日、鳩山由紀夫先生の講演を拝聴した。その体験は私にとって大変勉強になり、自分の考えがどれほど浅はかなものか、思い知らされることになった。

鳩山由紀夫先生は、友愛とは「自立と共生」だと述べられた。初めは、友愛とこれらに何の関係性があるのかさっぱりわからなかった

が、講演を聞いているうちに、その背後にある繋がりが徐々に見えてきた。

「自立」は他の助けや支配を受けず自分一人の力で物事を行う、つまり独立ということだと辞書に書いてある。自立したければ、まずは自己完成を目指して自分を磨くことが最重要である。自立した者でないと、他者に示しがつかない。自分のことで精一杯で、友愛だのときれい事を言っても、誰も信じてついてはこないのだろう。こうして見ると、自立は友愛の前提とも言えるかもしれない。

それならば、「共生」は友愛の方法論と言っているのではないだろうか。つまり共生の行動をもって友愛の精神を貫くということであり、植林活動はまさにその代表である。自分から環境への尊重を表し、人間と自然の共存を図る一方、共に生きている世界を守るという姿勢を取ることで個人と社会の共栄を目指す。一帯一路にもまた同じ理念がある。中国が著しい発展を経験する中で、近隣諸国と共にお互いを補い合い、協力し合う。相手もまた自立した者で、共生の道を歩むことを信じている同志ならば、共に手を結び、よりよい世界を作ることができるはずである。

今の私たちにできることは、友愛の精神を深め、日々の行いの中に実践することだ。例えば中日交流の中で、お互い違う文化を尊重し理解することを試みる。鳩山由紀夫先生がおっしゃった「自己の尊厳を持つ、他者の尊厳をも尊重」とはこういうことなのではないだろうか。やがて友愛の意識が自分の心に染み込み、行動に移すことによって、まわりの人々もその影響を受けて、更に友愛を広めて行くのだろう。

友愛というのは、実はごく簡単なものである。友愛のシンボルマークが表しているように、youとIでweになりworldにもなる。あなたと私、つまり私達が少しずつ友愛の思想を実現していけば、この世界は幸せと平和に満ちていくのではないだろうか。私はそう信じているのである。

私にとって友愛とは

任方遒（4年生）

時は春、校内の花も蕾を膨らませ春の訪れを一層感じさせる。朝早く起床し日本友愛協会の鳩山由紀夫氏と川手正一氏の講演へ赴いた。会場で頂いた風呂敷には友愛協会のマークが印されていた。W(world)と描かれたマークをじっくり見るとアルファベットでUとIの文字が組み合わさっている事に気がついた。友愛(UI)を意味している。言語を超えた巧みな表現に私は感心した。

私にとっての友愛とは国境や言語を超えて疎通できる力である。鳩山氏はこれまでに何度も中国に足を運ばれ、中国の若者との交流の際には友愛の理念を熱く語ってくださる。これこそ、この上なき友愛だと言えるだろう。なぜなら、同氏は政治の壁を超え、人生における一人の先輩となると共に、一人の人間として私たち学生の心に訴えかけてくれるからである。

労働節に私は北京で開催された世界園芸博覧会を鑑賞しに出かけた。世界各国の園芸展示区を巡り、園芸に対する各国異なる美の表現方法と、考え方を理解すると共に、異文化圏の伝統と現代要素における融合も十分に吸収してきた。会場の参加者は言語、人種を問わず共に語り合っていた。「美しい」という言葉は言語によって大きく異なるが、目の前に広がる一面の「美しい」庭園に見惚れる人々が見せる微笑み、明るい表情には共通するものがあつた。友愛が持つ一人一人を結ぶ神秘的な力を改めて実感した瞬間だった。

近年、習近平国家主席の指導のもとで、中国は世界における大国の一つとして、それに相応の役割を積極的に果たしている。以前の中国には「天下大同」という言葉が存在した。目下力を注いでいる「一带一路」は祖先から受け継がれた宝物であり、世界平和と互惠における重要な担い手である。今年三月、イタリアが「一带一路」参加への意志を表明した事で、中国の平和事業はアジアから世界へと前進する

期待が一層高まりを見せている。「中国が壁をなくしています。アメリカが壁を作っています。どちらが友愛なのか一目でわかります。」と鳩山氏は私たちに友愛の力を信じるように呼びかけた。

私が日本留学へ向かった時期に、日本はちょうど東京オリンピックに向けた準備が始まったころだった。これから留学生活が始まる私の町の至る所にも「東京 2020」というキャッチフレーズが掲げられており、お年寄りのボランティアの人たちは英語で一生懸命に挨拶してくれた。その時私は友愛とは単なるスローガンではなく、人々に訴えかける何かが必要不可欠だと切実に感じたのである。

公演後、川手氏は私の手をしっかりと握り「頑張ってください」と何度も労いの言葉をかけてくれた。この「頑張る」という言葉の中にも幅広く深い意味があるように感じた。日本語の勉強、一人の人間としてあるべき姿、さらに日中関係、ひいては世界交流の架け橋となることなど数多く挙げられる。友愛を通して学んだ事を心に刻み、これからも日々精進していきたい。

私にとって友愛とは

呉誠卿（3年生）

小さい頃からよく親に「周りの人を尊重して、愛しなさい」と言われたが、「友愛」というのが一体どのようなことかは深く考えたことがない。しかし、今回鳩山先生の講演を聞いて、友愛とは「一人ひとりを多様な個性を持つ存在と認めた上で、助け合って共に生きる」という言葉に多大な感銘を受けた。

しかし、そのような友愛精神は言葉にすると当然のように聞こえるが、現実の社会ではまだまだ難しいのである。

私たちが今生きているのは偏見が溢れる現代社会である。ネット上で意見の異なる他者を激しく「口撃」すること、独自の文化を持つ

ているアイヌ民族を差別することや宗教の違いでイスラム教徒を殺傷してしまうことなど、様々な偏見が存在する。しかし、そのような偏見をできるだけなくして、社会をもっと明るくするため、どうすれば良いだろうか。それは一人ひとりの生き方を尊重し、他人のことを常に思いやる友愛精神を持つことが大切である。

「自分の人生は自分で決める」という権力があるので、国も個人も一定の価値観で他人のことを判断してはいけない。同性愛か異性愛か、結婚するかしないかなどは全て自分の選択である。そのような様々な生き方を尊重するのは人権全体の根本とも言えるだろう。また、「思いやり」について、中国では、孔子も論語で「恕」という精神を提唱した。つまり、自分が排除され差別されたくないなら、好きになれない、どうしても理解できない相手に対しても、その個性を尊重することは重要である。さらに異質な者を受け入れることができれば、価値観のぶつかり合うことによって、再発見や自分の考えが正しいかどうかを再確認することもできるだろう。

友愛精神のもう一つ真意は違いを認めた上で、人々が助け合いながら生きていくことである。では、支え合う共生社会を目指すのはなぜだろうか。これは「三人寄れば文殊の知恵」ということわざが言ったように、一人一人の知恵や経験を出し合い、話し合えば、環境の変化に柔軟に対応できるからである。

特に格差社会が進みつつあることにより、強者と弱者がはっきり分けられている。しかし、これは強者が力を用いて、弱者を犠牲にしてもいいということではない。論語には、「恕」のほか、「仁」という精神も最高の徳目の基本として教えられている。つまり、共存生活ができるため、強者としても自己を抑えて秩序に従うべきということである。「アメリカ第一主義」を唱えるトランプ大統領は、何事に対しても判断基準が米国にとって損か得かである。そのような自国の利益を優先し友愛精神を持たない政治主張は米国の利益になるかどうか懸念される。

さらに、江戸時代でも、「飛び出ししぐさ」という扶助活動があるらしく、それは火事の多い江戸の町で火災が起きたとき、共同で活動し迅速に火の勢いを食い止めることである。大震災が多発し高齢者社会に入りつつある日本には、江戸時代から続き助け合う共生意識を心に留め置いて、行動に移すことができれば、再生できて愛が溢れる国になれるだろう。

多様性を拒絶し、弱肉強食ばかりの世界に、明るい未来はない。鳩山先生が提唱する「友愛精神」を頭の中に入れて、それを守りながら行動したほうがいいのではないだろうか。より良い社会を我々若者の手で一緒に作ろう。

友愛のちから

马依然（4年生）

三月中旬のある小春日和よりの穏やかな休日に、北京語言大学で「友愛大学」からの鳩山由紀夫先生御一行と出会って、本当に良かったと思う。一期一会かもしれないが、みんな同じ「友愛大学」で元気、やる気、本気をもって前に進むなら、これからもずっと一緒にいるような感じがした。

高校二年生の時、私は中日青少年友好交流プロジェクト「JENESYS2.0」に参加して、初めて日本に行った。当時、日本語は「ありがとう」しか話せない私たちに、普通に優しくコミュニケーションをしてくれた初対面の日本人の皆さんが持っていたのは、まさに鳩山先生が語られた友愛だと、今日の講演を聞いて感じた。異文化の人を排除することなく、尊敬する気持ちを持ち、積極的に受け入れ、必要な場合に助ける。これが友愛の精神だ。出会えた日本人の笑顔と優しさに感動を覚え、たぶんその時に「将来日本語を勉強しよう」という発想が頭の中に自然と湧いてきたかもしれない。

しかし残念ながら、世の中には「友愛大学」の名すら知らない人も大勢いる。鳩山先生が述べられたテロ事件からもわかるように、異文化の者から違う考え方を持っている者までに偏見を抱いて憎んでいる人間は、愚かな非人道的行為をしてしまった。仏教では「善いことをすれば善い報いがあり、悪い事をすれば悪い報いがある」という諺がある。だからこの世界には、因果応報のような法則があると私は信じている。誰かを傷つけるなら、またいつか誰かに傷つけられるのだ。

同じ人間であっても、家庭、文化、社会環境、経歴等、様々な面において差があり、「自然界には完全に同じものはふたつとしてない」と、ドイツの哲学者ライプニッツは言った。こう考えれば、他人と異なるところはむしろ自分のアイデンティティーのような存在であり、唯一無二の大切なものである。個々違うところがあるからこそ、世界は豊かで華やかになれるのではないか。「違うところが素敵。異なる文化、民族、宗教を大らかな心で認めるべきだ」という鳩山先生の心持ちに感動した。

確かに近年中日の政治関係はあまり望ましくないし、マスメディアが作り上げた偽った世論によって両国国民にはお互いの誤解がたくさんある。それにもかかわらず、鳩山先生は講演のなかで、日本語を勉強している中国人の私たちに期待や感謝の気持ちを何度も表した。恥ずかしながら心から嬉しく思った。そして、現在知らぬところで中国語を学ぶ外国人の人々に対して私は同じように感謝の気持ちを持つようになった。それは友愛の力ではないでしょうか。

世界は広い。私たち一人ひとりの人間は小さい。一生は短い。出会える人は少ない。だがその有限の関わりの中で、出来ることはたくさんある。しかし、やるべきけど、やっていないことが未だ多く残っている。持ちつ持たれつで、人から優しく対応され、つらい時には助けて欲しいならば、まず自分から友愛の精神をもって行動しよう！

私にとって友愛とは

楊皓月（4年生）

友愛という言葉には、「仁」を核心とする儒教の影響を大きく受けた私たち中国人にとって理解しやすい。私は友愛とは他人に優しく、尊重することだとずっと思っていて、周りの人と仲良くしようと頑張っていた。しかしながら、鳩山由紀夫先生の友愛についての講演を聞いて、私は友愛についての理解が一新した。

鳩山由紀夫先生によると、友愛とは自立と共生だ。初めて聞いた時、私は友愛と自立とは何の関係があるかとわからなかった。よく考えて、自立は友愛にとって不可欠なものだと分かった。カレルギーは自由と平等を繋ぐのは友愛と述べた。実は自由と平等は対極的な存在で、強い者は自由を手に入れ、弱い者は対等にされたい。私から見れば、友愛は強い者と弱い者を繋ぐとは言える。強い者は弱い者を尊重して助けるのはもちろん友愛の精神が溢れたが、弱い者はただ他者の助けを待ってはいけなく、自立して強い者との差を小さくするのも友愛だと思う。

友愛は自立と共生という概念を聞いてから、実は自分がずっと強い者の立場に立って友愛の精神を実践することがわかった。でも弱者から見た友愛とは何だろうか。近年、中国も日本も学校でいじめが次々に起きている。実は私は小学校の時もいじめ事件があった。古くおしゃれではない服を着るクラスメートの女の子は教室の隅で一人で座って、誰とも喋らなかった。存在感があまりなかったのに、この女の子はものが壊されたり、殴られたりしたことがよくある。そして、「あの子は臭い」、「両親はごみ拾いで生きていて貧しい家庭だ」などの噂もよくあった。あの時いじめたのは男の子だったが、あの子を助ける人がいなかった。私はこの女の子が可哀そうと思ったが、結局勇気がなく何もできなかった。今まで私も時々あの女の子のことを思っている。もし周りの人は優しくしてくれなかったら、弱者として

の自分はどうしよう。答えは自分で自分を救うことだ。つまり、自立ということだ。他の人から善意がもらいにくい時、自立して強くなって他者の尊重を得るように頑張る。だから、学校におけるいじめ問題を解決するため、学生たちに相互尊重、相互理解、相互扶助ということを教えるほか、自立して自分を救うも教えなければならない。

友愛を実現するため、人間だけではなく、国家も自立と共生という理念を実践しなければならない。強い国は善意を持って、弱い国を尊重し助ける。弱い国は尊重を得るため自立して国力を高める。これなら、友愛が溢れる国際社会が構築され、自由と平等な世界がきっと実現できると信じている。

友愛と発展

王馨玮（3年生）

先日嬉しいことに、鳩山由紀夫先生の友愛についての講演を聞く機会があった。鳩山先生は、個人から民族、社会から自然環境、様々な例を挙げて友愛について詳しく説明してくださった。先生の講演を通し、私も友愛について理解を深め、友愛は発展の前提だという認識を新たにした。

正直に言えば、以前の私の理解では、友愛はただ人に接する際自分自身が示す好意であることだと思っていた。人と初めて出会った時自分の好意を示したら、まず友達になれるだろう。また友人同士がお互いに尊敬し、認め、助け合うことも自分の好意を示す手段だと考えていた。しかしそうすれば、友愛精神は最初から最後までずっと自分自身が伝えることになる。だがそうではなかった。友愛精神は自分が伝えるだけではなく、自身を発展させることもできる。これは鳩山先生の講演を聞いた後わかったことだ。

一旦この問題は別として、実際に鳩山先生の講演を聞きながら、私

は中国古来の諺を思い出した。それは、「伸手不打笑脸人」という諺で、相手が自分に対して好意を示せば、自分も相手に対して、同じように接するという意味である。そうすれば好意を示す友愛は、先んずれば人を制するという社交的手段の一つであろう。人と接する時先に好意を示し、良い第一印象を与えるとともに友達も作ることができる。また、人それぞれ、独自の考えは必ずある。自分と違うところに対しても好意を示し、尊敬し、認め、その違う意見が自分の認識を広げ、自分自身を成長させることができるだろう。そのため、友愛は個人的に発展させられると考えている。

また、国との繋がりも友愛第一だと新たに理解した。先生は友愛精神で進めた一帯一路政策を例として挙げた。中国の一帯一路政策は各国共に発展することが目的で、他国に好意を示し、自国も大変発展を遂げている。従って、友愛は国を発展させることができると考えている。

最後に、友愛は世界も発展させることができると考えている。この点で、鳩山先生は人と自然の共生を指摘した。以前の私たちは、自然に対して本当に友愛的だとは言えないだろう。自然資源を過剰に採掘し、地球温暖化や砂漠化、色々な環境問題が出てきた。しかしそれこそ、今私たちが積極的に環境を改善しようとしている最中といえるだろう。植林などの解決策は、実際に私たちが環境に友愛を伝え、好意を示すことだ。このように、友愛の気持ちを自然環境に伝えることで、この世界の未来はさらに発展すると信じている。

これまで、友愛は私に何を与えてくれたのか、もう何も言われなくても理解できる。友愛は私自身、また自分の国、さらに世界を発展させることができる本当に大切なものだと考える。私は必ず、この友愛の精神を持ちながら人生を過ごし、また友愛をさらに多くの人に伝えていきたい。

複雑な「友愛」

季童一心（4年生）

天地が若々しく冴え冴えしい初夏、街路が特有の清々しさに包まれる。学園祭の会場に置いているスピーカの音が人々の関心を向けさせ、異国で流される日本、韓国の調は人々の歓談と響き合う。新緑の美しさがまだ色褪せない初夏なのに、全てを溶かしそうな熱情が感じられる。国境を超えた友愛の風景。

鳩山由紀夫の講演を思い出す。「友愛」を「自立と共生」と定義付けると、日常生活だけでなく、国際関係の分野でも「友愛」が無視できない存在となる。それと同時に、複雑にもなると思う。

一年前に日本に交換留学期間中のことだった。軽音の部活でリハーサルの最中、ギターの子（中国人）はどうしてもうまく弾けず、落ち込んでしまい、バンドから脱退しようとした。他のメンバーは「頑張って」、「一緒に練習しよ」と彼女を本番の前日まで励ましつづけたが、リハーサルが終わり、帰り道で彼女が、「どうしてみんなが慰めてくれるの。いくら練習してもうまくいかないと自分も知っているのに。ライブが失敗したら絶対私の責任になるんじゃない。頑張って、一緒に練習しようなんてどうせうまく弾けるお前たちのお世辞の言葉に過ぎないだろう」と私の前で泣いてしまった。私は結局「なんとかかなるさ」のようなあやふやな言い方で会話を終わらせた。本番の日にあの子は連絡なしに来られず、ギターは他の先輩に演奏してもらった。結局彼女が一連の事情で自信を失い、人生に絶望して自殺までしようとしたことは、軽音の中で私以外に誰も知らなかった、誰も本番の日に彼女が来ない理由に気にしなかった。

確かに、自由にバンドを結成し、技術を向上させるために一緒に練習し、困りや悩みがあったらお互いに相談できるサークルの雰囲気はまさに「友愛」と言えるが、それは、確実にサークルに溶け込んだ部員に限られた一部の「友愛」に過ぎないと思う。言い換えれば、経

験豊富の何人かの間に「友愛」が語られるとしても、技術が足りない新入生、言語力に優れない留学生、空気が読めない部員などには、「友愛」を言う資格がない。なぜなら、彼らが「友愛」の空間に入っても、その空間に利益を与えない「他者」とみなされるからだ。「友愛」は綺麗な言葉だが、実は実現し難い、残酷な理想であろう。

「共生」の前提は「自立」だと思う。自立できない人は他人を助けることができないので、助けてくれる者に利益を与えず、助けてもらう機会も失うかもしれない。それに、自立できない人は助けてくれる人に依頼しすぎる可能性があるので、容易に助けを受けてはいけない。国際関係においても同じだと思う。宇治にあるレストランの女将の冗談半分の言葉を想起させる。「皆違うものを求めているもん。自分も満足していないのに、ほかの誰かを助けるなんて、利益を求めだけが目的なんじゃない。アメリカは日本の発展を手伝ってくれたけど、日本からたくさんの利益を得たのよ。それに、日本はもうアメリカなしで生きていけない国家になってしまったよ。中国は違って…」

国家の間に「共同体」があり、それはまさに「友愛」の空間といえよう。しかし、どの国に「共同体」の運営を任せるか、どのような国を「共同体」に受け入れるか、「共同体」に加入する前にどのような準備が必要なのか、など、「友愛」の空間で「共生」する前提を考えなければならない。「自立」ができるからこそ、「共生」が成立し、「友愛」の空間が維持できる。したがって、「友愛」の空間で「共生」を実現させるために、個人にせよ、国にせよ、「自立」に向けて進むべき、「一部の友愛」にならないように、皆で努力するべきだと思う。

浴衣の袖を揺らす夏風に、国境を超えた友愛の風景が続いている。

私にとって友愛とは

李芋婷（3年生）

「友愛」という言葉は私にとって子供の頃から馴染みのある言葉だが、先日鳩山先生の講演を拝聴し、「友愛」という言葉はこんなにも膨大な意味を含んでいるのかと感銘を受けた。それをきっかけに、「友愛」についてより広い視点から考えてみた。

友愛は友人との愛だと以前の私はこう思っていた。しかし、鳩山先生の講演を通し、友愛はそう簡単で、狭い意味の言葉ではないと分かった。

鳩山先生は講演で、ニュージーランドのテロ事件について少しお話された。世界中のテロ事件はそもそも人種差別、宗教差別などによって起こるのだが、鳩山先生は「人間は違うところが素敵」、「人それぞれに特徴がある」、「どんな人間も素晴らしい」というふうにおしゃった。もし世界中の人々もこのような友愛の精神を持っていれば、テロ事件の数は減っていくだろう。

ところで、北京語言大学には世界各地からの留学生が集まり、皆それぞれ違うけれども、お互いに尊敬している。そのため、この学校はいつも友愛の雰囲気が出ており、生き生きしている。毎年五月頃、「世界文化祭」という学園祭が行われ、留学生は母国の特別な食べ物を販売したり、母国を代表するものを集めた看板を作ったりし、模擬店を出す。それだけではなく、鮮やかな民族衣装を着て民族舞踊を踊ったりする留学生の姿も見られる。毎年100以上の模擬店が出され、国境を越え、人種を問わず、皆この文化の盛宴を楽しむことができる。そして、各国の模擬店で中国人のボランティアの姿も時々目に入る。中国人学生はボランティアとして、模擬店の準備や当日の販売を手伝い、留学生と友達にもなれるだろう。

知らず知らずのうちに、尊敬する、違いを認めるという気持ちは友愛の精神から生み出された。これに対し、友愛の精神を持っていなく

ればどうなるだろう。鮮やかな民族衣装は一様にそろっている洋服に取って代わり、ボランティアの姿が見えず、留学生の困っている様子が目に浮かぶ。それに、100以上の国が参加することは想像できないという状況になるかもしれない。

世界文化祭は小さな例だが、この小さな窓を通して世界を覗くことができる。人々を繋げ、広大な世界を繋げるために最も良い道具は友愛なのだ。2018年5月、李克強首相が日本を訪問して以来、日中関係が徐々に改善してきているようだ。これからの日中友好のために、我々日本語専攻の学生も一部の責任を担うべきだ。

もう一つ感銘を受けたのは、鳩山先生の植林活動だ。友愛は人間社会だけではなく、人間と環境の間にも存在していると分かった。中国は急速な発展につれ、環境汚染も深刻になってきた。経済利益をもうけると同時に、自然環境への尊敬・友愛の精神を忘れてはならない。

私にとって友愛とはお互いに尊敬し、違いを認め、助け合うことだ。自然環境と共生していき、世界の平和・文化の多様性を守るために、友愛の精神を持って行動することが大事だ。

私にとって友愛とは

金詩桐（3年生）

北京の暖かい春のある日、鳩山先生のスピーチを聞いた私は、実に感銘を受けた。毎回道を歩いている時、看板に書かれた「自由・平等」や「友善」という言葉が目に入るが、実際に、その言葉についてあまり深くまで考えていなかった。しかし、今日の講演会で鳩山先生の解釈を伺い、自由、平等、友善の三つが深く繋がっていることに気付いた。現代社会の我々は常に回りの人といろいろな人間関係を持っており、それと同時にみんなは自由を求めているが、自分の自由を確保するために、他人の権利や利益を損なうこともよく見られる。そうす

ると、平等に生活していくなどということはできないだろう。そのため、自由と平等を両立させるために、友愛が必要である。この場合で、友愛はまるでクッションのような物で、人と人をつなげていきながら、わだかまりを取り除くことに役立つわけである。

友愛には、共存共生という原則が大切だと思う。こちらの共存共生の原則は同じ民族の人々の関係に応用されたものだけではなく、人種や民族や性別などを超えてお互いに理解し、信頼を深め、親しい関係をつくろうとしていることにも使える。先日にも上映された映画「GREEN BOOK」はアメリカの白色人種と黒色人種の複雑な関係を描きながら、人種を超えた二人の友情を語った。

それを見て感じたのは、友愛とは決してスローガンのような言葉ではなく、自分と回りの人たちに幸せにするコツである。また、友愛の精神を実行するには、相手のことを気遣い、思いやりを持つという意識が大切である。特に、人はみんな同じという思い込みを排除しつつ、間違い探しは慎むという離れ業のようなことをしなければならない。この二つのバランスをうまくとりながら、相手と友愛精神で人間関係を構築していくさまは、まるでサーフィンに乗って波乗りをしているようなものではないだろうか

私も子供時代から、ずっと回りの人と仲良くすることに気をつけている。よく友達の嬉しさや苦しみに耳を傾けて無視しないようにする私も、そのプロセスの中で、ありがたい友人関係ができた。特に、去年の秋から、日本人の友達と一緒に毎週日曜日に一緒に勉強したり、遊びに行ったりすることは印象が残った。もちろん、ずっと日本語で交流する時、難しい内容や複雑な感情を言い伝わるのは難しかったが、真摯な態度で相手の表情を観察して、心をこめて交流していけば、友愛という精神は絶対に感じられる。

確かに、友愛精神は実行しなければわからないものである。日本語を勉強している私たちは、未来の中国と日本の架け橋の役割を果たすかもしれない。これからは、自分の名欲や財欲などを控え、墨子の

語った「分け隔てなく、すべての人を愛する」という原則を守り、夢を諦めず、やる気を持ちながら、本気で友愛社会を実現することに貢献していきたい。

私にとって友愛とは

邵飞琼（3年生）

「友愛」という言葉はたったの二文字しかないが、その解釈は個々の人によって異なってくる。私から見ると、「友愛」という言葉から、「人を友として愛する」の意が読み取れる。それは、自然に生まれたものではなく、自愛の元で生まれたものである。つまり、自分を愛することによって他の人を愛することができるのである。

前述したように、私の言っている「自愛」とは、「自分を愛する」ことで、具体的に言うと、「自分の利益を保つ」と解釈してもよいだろう。利益は単なるお金のことを指すだけだと思っている人が多いかもしれないが、私は、生命、健康、財産、社会的地位、感情など、そのすべてが利益の範囲に入っていると思う。自分の自愛と他人の自愛の間に重なる部分が現れた場合、友愛が自ずから生まれるわけだ。同じチームに属する人たちが同じ目標を実現させるためにお互い協力し合うことはその一例であろう。それと反対に、自分の利益と他人の利益の間に根本的な違いが存在する場合、更に言うと、もし自分の生命が他人に脅かされるような状態に陥ったら、友愛が生まれるはずがない。恐らくそれこそが戦争を引き起こす一番の原因ではないかと私は思う。ここでの「友愛」は人間の動物的属性によって決められたもので、一般的な「友愛」と思われる。

しかし、利益の共有であろうが、根本的な衝突であろうが、自分と他人との間に必ずしも存在するというわけではない。実際に、あまり関わりがないほうがはるかに多い。では、この場合、友愛を実現する

ために、どう行動すればよいのだろうか。そのカギは自分を知ること、他人を知ること、または社会を知ること、すなわち周りを感知するところにある。そこから、人間は一つのグループとして他のグループと競い合い、自然と戦いながら、繁栄してきたのだということが見て取れる。これからも、ともに様々な問題に対処しなければならないだろう。そのためには、自分の利益と社会の利益が一致することが好ましい。よって、人々は集まって団結する必要があるのだ。これは自明なことだと言っても過言ではない。それがわかれば、人間はお互いを理解し、包容し、協力することになる。言い換えれば、「友愛」になる。この「友愛」はすでに動物的属性を外れて、人間が自分の意識を駆使して、選択したものに变身した。つまり、特別な「友愛」と理解してもよい。

よって、私の考えている「友愛」は二種類ある。一つは人間の本能として働いている「友愛」、もう一つは道理にかなった「友愛」である。いずれの場合にしても、その前提が「自愛」であるのは言うまでもないことだ。更に、「友愛」は自分の生活向上、また人類全体の発展に役立つ大変有力な手段に違いない。「友愛」は神様から恵まれていただいた賜物であると同時に、人間の不思議な知恵もその中に現れている。

人と人をつなぐ友愛

周心伊（3年生）

友愛とは何か。先日、鳩山先生の講演を聞き、この質問に対してより広い視野から考えるようになった。友愛とは、単なる個人的人間関係の有り様だけではなく、地域を平和にするため、人類の持続的発展を実現するための、人と人をつなぐ架け橋だと思われる。

講演の初めに、鳩山先生が3月15日にニュージーランドで発生し

た銃撃事件に言及した。イスラムの礼拝所で起こった事件なので、宗教や民族問題にかかわらないとは言えないだろうと思う。同じ人類であるにもかかわらず、信仰や民族が異なるというだけで、ほぼ百人ぐらいの死傷者がでた惨劇を引き起こしたのは、人々にとって警鐘になるべきだ。何よりも大切な人の命をむやみに奪うことは憎しみを激化するだけである。武力では徹底的に問題を解決できず、異文化の人たちと交流しながら、相互尊重の基礎を築き、相互理解を深めることこそ正しい道だと私は思う。この場合、友愛という理念がいかに重要に思える。友愛の心を持ち、相手の立場を考えるうえで、お互いに矛盾や誤解の解消を目指すべきである。そうすれば、人と人の結束が固まり、地域も平和になることができるのではないだろうか。

友愛は矛盾を解くかなめであるだけでなく、社会を持続的に発展させるのにも大いに役立つわけだ。交換留学の間、日本の大学にも学生全体に対して「一帯一路」を説明する講座があると知り、きわめて感銘を受けた。グローバル化の逆転しかねない今の時代に、国際的連携が足りなければ、各国自身の発展と民衆の福祉もうまくいかないのではないだろうか。したがって、各国の人々が自身の利益にこだわらずに、人類全体の幸せのために協力すべきだと思う。友愛の架け橋によってお互いに融通し合い、持続的発展を図ることは、どのような成果をもたらすのか。時間が必ず好ましい答えを教えてくれるだろうと私は信じている。現に、その成果は徐々に見えるようになっていく。アメリカ航空宇宙局のデータによると、過去20年間、中国が世界的な緑化傾向には多大な貢献をしている。昔、中国では過度の森林破壊のせいで、大気汚染等の環境問題が隣の国まで影響を及ぼしたほど深刻だったが、近年、人類全体への友愛の心を持ち、他国と協力し、段階的な改善を達成している。その中にも、日本友愛協会の植林活動の力もある。塵も積もれば山となる。一本の木では林にならないけれども、それぞれの力が結びつき、相互扶助ができれば、世間に注目される素晴らしい貢献ができるはずだと私は感じている。

私にとって友愛とは

沈思遠（4年生）

北京の暖かくなりつつある春の中で、鳩山由紀夫先生の講演を聞くことができ、非常に喜ばしいことだった。鳩山先生は、自分が「友愛大学に入学したばかりだ」と言い、個人的な感想から国際社会における様々な出来事まで、例を挙げながら、友愛を分かりやすく説明した。それを機に、私も友愛についていろいろ考えてみた。

講演を聞く前に、私にとっての友愛とは、身近な人が困難に陥った時、助けの手を差し伸べることだ。しかし、鳩山先生の講演から、友愛は単に他人を助けるくらい狭いことのみならず、自分の長所を認め、自分に自信を持つのも友愛の一面だと分かるようになった。なぜなら、自分に自信を持っていないと、他人を助ける能力も持ってないからだ。自信を持ってから、心を広げ、より大きい世界に身を投じ、他人を助ける。そういうことこそが友愛の本質ではないか。

鳩山先生の講演で、自由、平等、友愛の関係についての話も響いて印象深かった。鳩山先生の言った通り、自由は弱肉強食の社会の一因だと言わざるを得ない。その反面、平等は解決策として唱えられる。しかし、完全に平等な社会が実現できたら、前に進む動力が失われるかもしれない。そこで登場するのは、自由と平等を両立させる友愛だ。友愛は潤滑油の存在で、自由と平等をバランスよく調整する機能を持っている。「友愛はそういう役割をも持っているんだ」と私にピンときた。では、今の私にとって友愛は何だろう。

私から見ると、友愛の概念は、小さいと言えば小さいが、大きいと言えば大きい。講演が終わった後、在席の皆さんは一緒に写真を撮ろうとした。皆さんは写真を撮りにステージに向かった途中、鳩山先生の奥様が笑顔で学生一人一人に「ありがとう」と親切に言ってくれた。小さいことですが、これはまさに友愛ということだと思った。鳩山先生の奥様のように、友愛を念頭において日常生活に実践する人がい

るからこそ、友愛はどんどん世界の隅々まで広げられるのではなかろうか。また、より大きいスケールでの友愛について、鳩山先生は中国政府が提唱している「一帯一路」という政策を言及した。「一帯一路」は、平和の構築や地域の繁栄を目標とし、人類運命共同体の建立を目指している。私の理解では、人類運命共同体の建立は単に政治面にとどまらず、経済発展、環境保護、社会問題などの様々なことが含まれている。そのすべては、友愛と切り離したら実現できないと思う。友愛は私たち人類がいる世界と切っても切れない関係を持っており、日々の行いにも、国の政策にもあるほど私たちと緊密に関わっているとと言えるだろう。

初春である今は、桜が咲く時期だ。その時期に、鳩山先生の講演をきっかけに、改めて友愛を深く理解することができ、とても光栄で有意義である。これからも友愛を忘れずに生きていきたい。友愛の花も桜が咲くように、世界の隅々まで咲けるよう、心から祈る。

友愛とアジア

王婧怡（4年生）

東アジアの国々は地理上に繋がっているだけでなく、お互いの文化も深く繋がっている。その繋がりが様々な交流を生み出した。そして、孔子の思想が東アジアに強い影響を与え、その結果、思考様式なども東アジアの国々の間に共通点が多い。しかし、リージョナリズム時代と呼ばれる21世紀においては、未だに東アジアと名付けられた組織はない。東アジアというのは、統合した集団より地理的なコンセプトに過ぎないようだ。その原因はいろいろあるが、今の時点では、東アジアの統合をどう推進するかということを考えるべきだと思われる。その一つの重要な要素は、私は「友愛」だと考える。

先日、鳩山由紀夫先生の友愛と平和についての講演を聞き、友愛の

ことをさらに深く理解することができた。友愛の原則は「お互い尊重し、理解し、助け合い」と先生がおっしゃった。日中交流の基礎は若者の交流である、両国の交流は経済、文化、および青年たちの交流に基づくのだという観念に私は共感した。友愛はまさにその交流の発展の原動力ともいえるであろう。友愛という心がなければ、交流が進めないのである。

近年、中国と日本の交流はますます活発になっている中、最も目立つのは民衆たちによる交流である。日本観光庁によると、2018年の観光客数には、中国人の観光客が第一位を占めると分かる。また、両国の大学たちが「キャンパスアジア」という交換と交流を目指すプログラムを設立し、中国と日本の高等教育のネットワークがこれによって築かれ、将来の若い世代にきっと深い影響を与えるのであろう。そして、インターネットの発達のおかげで、日本にいる人たちが中国のショッピングサイトで中国の品物を簡単に手にいれることができるし、中国の人たちは「グーグル翻訳」などを使って日本語が分からなくても日本人と会話をすることもできた。

中日の若者たちも中日交流の舞台に輝いている。私は日本語専攻の学生で、同じ日本語専攻の学生になぜ日本語を勉強しようと思ったのかと聞くと、日本が好きだからという答えが多い。中国のSNSでは、たくさんの若者が独学で日本語を勉強し、日本のことに熱心である。日本でも、中国のことに興味を持つようになった若者が少なくな。動画サイトでは、中国の文化、ファッションなどに関する動画がよく見られる。そのような動画をつくった人々はいつも中国文化が好きだからと言っている。彼らは中日交流のかけ橋のような役割を果たしているのである。

以上は中国と日本の例だが、その中に含まれている「お互いの文化、社会を尊重し、理解すること、助け合うこと」、すなわち、友愛のことがどの国にも適用できる。友愛があるからこそ、国と国の間に紛争、齟齬があるとしても、交流は順調に進んでいくことができる。時代の

趨勢は統合することである。未来の東アジアは必ず統合するので、その道が「友愛」に隠されている。

私にとって友愛とは

婁洋（3年生）

友愛は普段生活でよく耳にする言葉で、中国の社会主義核心価値観の中にもある。鳩山由紀夫先生の講演を聞き、友愛とは何かについて深く考えた。

私の中日友愛体験といえば、去年沖縄のことであった。それは、西表島のあるうなりざきというダイビングショップでの一ヶ月のインターシップであった。私の初めての海外旅行なので、日本の会社のルールには詳しくなかった。日本人の先輩たちが挨拶のやり方や会社のスケジュールや敬語の使い方などを優しく教えてくれた。何かのミスをしてしまった時、先輩たちも怒らず、私と一緒にやり直してくれた。その島には、中国人の観光客が少なく、そばにいた友達は全部日本人だった。日本の友達はいつも「最近はどうですか」とかを聞き、遊びにも誘ってくれた。彼女たちのおかげで、楽しくインターシップを終えることができた。今も沖縄でのことを思い出すと、心が暖かくなる。

友愛は人と人の間のみならず、国と国の間にも、重要な地位を占めている。グローバル化の進展に連れ、国際的な協力もますます重要になっていく。友愛がなければ、利益を追求するために、戦争が起こる恐れがある。20世紀は戦争の多かった時期であった。第一次、第二次世界大戦戦争などが典型的な例として挙げられる。国連の調査によると、第一次世界大戦の二大陣営である連合国（協商国）および中央同盟国（同盟国）を合わせた犠牲者数は、戦死者1600万人、戦傷者2,000万人以上を記録しており、これは人類の歴史上、最も犠牲

者数が多い戦争の1つと位置付けられている。戦争が行われ、人々の命を守るさえできなければ、経済の発展、技術の開発などは進むはずがない。ここで、友愛の重要性が見えてくるのである。戦争を避けるために友愛という精神が大事だ。

今、周知の通り、地球の環境は悪化している。地球温暖化、大気汚染、水質汚染、資源不足などの問題は発生している。上計のような問題の影響は国境を越え、地球的規模の性質を持っている。これらの問題を解決するために、国々は他国への、環境への友愛精神を持ち、多国協力しなければならない。

外国語専門の学生として、国際交流の最先端にいると言えると思う。よって、私たちはよく外国語を勉強すると同時に、友愛精神を心得なければならない。異文化の人と交流する時に、違いを尊敬し、友愛を相手に感じてもらうことも大事だと考える。そうした上で、心の絆を築くことが成り立つのである。

理想的な友愛

呉雪婷（3年生）

友愛は幼い頃から馴染みの言葉である。その重要性はよく教わっているが、なぜそれが普遍的に実現していないのかはなかなか言及していないようだ。本稿ではその原因について、少し自分の未熟な考えを述べたいと思う。

まず、友愛とは国、民族、性別などの差別がないという制限で、お互いの交際の過程で自然に現れる親しみの感情である。

しかし、それを成立する一番大事な条件—差別をなくすことはまずできないであろう。なぜなら、人々はマイナスのラベル、いわゆるレッテルを貼り、それによって差別を正当化する傾向があるからである。

我々は皆、否応なしに生まれた瞬間にラベルが貼られる。それには、性別や外見といった本人が持つ特有のものだけでなく、親の職業、家柄、家族の境遇など本人の周囲の人間に関するものも含まれる。例えば、「医者の子」「政治家の家系の子」「精神病の家族を持つ子」など。これらに共通しているのは、ラベルは他者、あるいは社会との関連や比較の中で生じる社会的な概念であるということである。私たちは知らず知らずのうちに、人を判断するための基準としてこれを用いている。

また、マイナスのラベルであるレッテルには、感染症のように広がるという特性がある。生まれながらに貼られるものだけでなく、人生を歩む中で、レッテルは拡大するのである。それらのレッテルにより、差別される可能性が高まる一方だと考えられる。

もちろん、友愛が実現していない原因は他にもあり、差別という問題は解決できないので、友愛は必ず実現できないという意味ではない。政策だけでなく、教育または、公民教育によって、差別にもたらす弊害をしらせ、人々の包容力を高め、少なくとも友愛の道へ前進することができるのではないだろうか。

現在のところでは、その問題の原因を見つけ出すだけでは何にもならない。その解決策はまだ考えだしてなく、探し続ける必要がある。いずれにしても、友愛は心から自然に生まれる感情であり、外界の作用の下で真の友愛を形成するのは難しい。そこには社会の一人ひとりの共同努力が求めると私は考える。

自然への友愛

李睿（3年生）

友愛と言えば、子供時代の先生の教えや学内に貼ってあった「友愛」という文字などが頭の中に浮かんでくる。それは私と「友愛」という

言葉の最初の出会いだっただろう。そして私の心に初めて友愛を感じたのは幼稚園のころ、先生に怒られた私に、友達がハンカチを渡してくれたときだった。私は今でもその温まりを覚えている。それに今、そのときの友愛の種が徐々に立派な木に成長し、私にとっての友愛の意味が広がってきた。友愛は人間に対してだけでなく、自然に対しても同じことが言えると考え始めた。

鳩山由紀夫先生は友愛についての講演で自分が毎年植林活動をしていると語った。私も小学生のころに植林活動に参加したことがある。しかしその時、木を植えるなんてあまりにもつまらないと思っていたので、まったくやる気がなく、一刻も早く終えて帰りたいかった。しかし今それを振り返ってみると、植林活動によって自然に友愛のメッセージが伝えられると考えるようになった。自然への友愛とは植林活動だけでなく、日常生活にまで浸透することによって、自然を尊重し、愛することだ。たとえば、できるだけ公共交通機関を利用したり、エコバッグを持って買い物をしたりする。いずれも小さな行動だが、ちりも積もれば山となるといったように、一人一人の小さな努力を積み重ね、「山」となった時はじめて自然への友愛が輝くのではないだろうか。

しかし、現状、友愛的な行動ばかりではない。最近、大量のごみが動物の死骸の中から見つかったというニュースをたびたび見ている。とても見るに忍びなかった。それほど量の量のごみは決して一人だけが捨てたものではない。ごみ処理のコストが高いので、常に強い目的意識を持っている人間は経済利益を優先させ、友愛の気持ちを捨てている。しかし、友愛の欠如による悲劇はそこでは終わらなかった。人間の糞便への検査によって、体に有害なマイクロプラスチックが9種類見つかったそうだ。つまり、人間は友愛より利益を重んじた結果、自分が捨てたものに踏みにじられるという悪循環に陥った始末だ。

しかし、利益は本当に友愛と分けなければならないものなのか。講演の中で、鳩山先生は墨子が唱えた無差別の愛情である「兼愛」思想

に言及した。「兼愛」は結果的に互いが福利を得られる「交利」となる。鳩山先生が言ったとおり、友愛とはお互いに尊重し、助け合うことだ。お互いに尊重してはじめて友愛が生じる。そして友愛が生じてはじめて持続可能な利益を得られる。つまり実際に、友愛はより安定的に利益をもたらしてくれるわけである。逆に、自然から恵まれたものを友愛の気持ちで扱わなければ、自然から報復を受けることになる。

私も少しでも友愛的「ちり」を貢献しようと思い、ごみ回収や廃棄物の再利用などのボランティアにたびたび参加している。私は人間が友愛の気持ちで自然と手をつなぎ、「交利」に向かって歩いていくように願っている。

炎にとかさされた氷、それこそ友情

季金晟（4年生）

「中国と日本とは一衣帯水の隣国である」ということは何度も人々に言われるので、既になにか珍しい言い方ではないと思う。私の目から見れば、中国と日本の関係は従来このような「一衣帯水」という言葉だけではまとめることのできなく、かなり複雑な関係だと信じている。

歴史的な角度から言えば、昔の日本は中国から先進な文化を学び、それに基づいて当時の日本独自の文化を作り出した。近代に入ると、戦争のため中日両国は対立するようになって敵国の関係になった。それにしても、何年を経て中日両国は何らかの理由でまた親密な隣国になった。このような複雑な関係を「一衣帯水」だけで簡単にまとめるのができないわけであろう。

さらに、もし日本海を全て氷にさせるとしたら、おそらく、中国と日本とは「氷」を隔てて近接している隣国になるでしょう。幸い

なことに、中国と日本の中で存在しているものは氷ではなく、渡すことができる海である。

確かに中国と日本とは似ているところもあるが、大きく違っているところもたくさんあり、大げさに言えば、物凄く異なっている二つの国だと言ってもいいでしょう。では、価値観、世界観と人生観の完全に違う国の人に対して、互いにどのように友達を作るかは、実に大きな課題ではないか。

両国の友情を成していくためには、まず相手を知らなければならないのである。そして、知った上で段々理解していき、最後に納得できる。このようにすれば、両国の国民の絆が自然に生まれると信じている。

大学に入ってなかった頃、日本語が全然わからない。しかし、日本のアニメをよく見たり、漫画をよく読んだりしていたので、日本人に友情を持っている。これは、アニメなどを通じて日本と中国の文化や人などの違いが少しずつ理解できるようになるからだと思う。

私にしてみれば、互いに対岸の国の人々の相違点を尊重し、理解し、納得することが何よりも重要なことだと考えている。

中日関係のために大きなことをやらなくてもいい。生活の中で普通の人として、海の向こう側に住んでいる人の違いを知り、さらに納得できるのも中日関係の改善、さらによくさせることに貢献することに至っていると思う。まさに鳩山由紀夫さんがおっしゃったように、日本と中国とは価値観が違う国だが、共存共栄の関係を持っている隣国でもある。

両国の若者として私たちは今、多分できることが少ない。だけど、できる限りに中日両国の関係のためになにかができると言えば、まず違う国の価値観を理解することと相手を知ることだと私には思われる。こうしていけば、両国の「氷を隔てて近接している」関係を両国の国民の「炎」の友愛に溶かされ、長続き維持されてい

くのではなかろうか。言い換えれば、炎に溶かされた氷のような関係こそ友情ではないかと思っている。

偽物でも、いいから

——自分にとっての友愛

索朗央宗（3年生）

友愛とはどういうものなのだろう。

世界は広い、そこに生きている人間もあまりにも多い。それは、それだけ違う心の持つ個体が同じ空の下で生きているということ。

衝突は免れるはずがない。どんなに進化を遂げたところ、人間は生き物の範疇から逸脱しない以上、物質条件や感情に駆られて生きるしかない。それは歴史を辿って見ればすぐわかることであり、ただ生存するため、時に争いの渦にいるどちらも間違えた訳では無いこともある。そして悲しいことに、人間同士の隔たりは未だお互いを傷付けている。

果たして人間は、分かり合えるのだろうか。

悲観主義だからか、時々人間とは何かと思う時がある。領域こそ様々あるが、平和を訴える個人や組織——友愛精神を含めた行動や掛け声が増えたと同時に、規模こそ縮まったが、衝突や争いは一向に消えず、より悪質なものへと変貌した。そしてそれは全体だけの話ではなく、一人一人の触れ合いから見ても、人は発展につれて何かを忘れたのかもしれない。人の心に絶対はない、だがこうも矛盾なものなのかと、自分は今日も答えのない自問自答を続けている。所詮凡庸な一個人は世界を動かさない、と嘲笑いするような、自嘲するような日々を過ごす。

でも人間はまた不思議なものでもある。

誰かと接触して、交流する。その人間にとって当たり前な行為から

破綻が生まれることもあれば、共感を得たこともある。違いは人々を結ぶこともあり、衝突は理解を深ませることもある。何より、誰かに触れて、話して、またその誰かから何かをもらう——例えば、喜び、悲しみ、怒り…そのことが確実に繋がりを生んでくれた、「絆」とも言えるだろう。

気付けば、世界もそのような繋がりで結びつき、明日へと繋いでいく。

人の心に絶対はない。そして人は心を完全に見破れない。それでも、笑顔を忘れない人がいる。喜怒哀楽がままならない世の中、人は誰しも過ちを犯すもの、誰もが大切な物や人に出会い、別れる。過ぎたことを否定も肯定もできず、それでも前を進むのが人間だ。そう、人の世は醜いものではあるが、決して美しいものの一つも生み出さない世界では無い。そこに矛盾があったからこそ、人は変えようとして、世界はさらなる進化を遂げられるかもしれない。

友愛とは、その人間、その人の世を繋ぎ止めるものではないだろうか。誰かを大切に思い、誰かに大切に思われる。その優しさだけでは幸せではない、嘘もあれば裏切ることもある。とても本物とは言えないが、遠い、あるいは近いうち、人はきっと新しい答えを得るだろう。だが今の人に来るのは、限りのある命の中で、それぞれの思いを伝えることかもしれない。

たとえそれが綺麗事ではない偽物でも、いいだろう。

私にとって友愛とは

呉煜昊（3年生）

私から見ると、「共感」は自然に「友愛」を導く。そして、理解の道を塞ぐ山より高い壁は「言葉」と呼ばれる。本文では、今私が自分の手でその壁を砕くためにしている努力を紹介したい。

一年前から報酬のない字幕グループの一員として働き始め、今は

運営の責任者を担当している。私達と協力しているVTB 赤星ナナハさんのフォロワー人数も 400 人から 17325 人に増えた。最初はたった3人だけのチームだったが、今は翻訳者や動画編集者だけでなく、live2D や 3D モデル作成者、原画を担当する人、ビデオやオーディオエフェクトを担当する人など、字幕グループというより運営側に似ている 25 人のチームになった。それに、赤星さんから正式に委任されたので、前途も明るい。しかし、その結果は私の最初の希望に背いた。

何故かと言うと、赤星さんは日本では珍しいタイプの人「ⁱⁱ共産趣味者」である。何ヶ月か、グループの皆は掛け橋として必死に働いて、視聴者の観点を、やっと、最初の「こいつはその偉大なる理想を娯楽主義で侮辱してる」から、「なるほど、日本人なのに、同じアイデアをシェアして、そこまで私達を分かってくれて、ありがたいね」に変えた。しかし、共産主義者や趣味者は日本や他の国で孤立しているという事実も視聴者に深い印象を残した。つまり、視聴者達は赤星さんには愛や共感を持つようになったが、他の外国人に対しては逆に嫌悪感を抱くようになった。

イデオロギーというのは、早い段階では力添えになったが、それなりの制限性もある。その制限性は分かっているつもりだったが、その制限から脱出するということを真剣に考えていなかった。先日、川手常務が「イデオロギーを乗り越えた方が良い」とアドバイスしてくれたのをきっかけに、色々と考えた。その結果、私はいつか、「国家間の相互理解を推進すること」を主旨として活動する VTUBER 組織の設立を目指そうという結論に至った。

勿論、僕はチームリーダーとして、貴重な思い出や経験を作ってくれた大切な同志諸君を簡単に手放してはいけない。ただ、思い切って現状を変えないと、その壁に強い一撃を与えることは不可能に近い。

企業の資金と専門性、それに、利益ではなく理想を求める信念、これらの間にバランスが取れる組織でなければ、この戦いに本物の

意味で勝ち抜くことができない。

多分、今の私は、そういう組織を作り、上手く運営する実力を持っていない。でも、必ずいつか、言葉とイデオロギーそして国境と政治的立場を乗り越える組織を作れるように、私は自分の経験や能力、資金と人脈、あらゆる力を貯めて、計画を立てて、「愚か者」としての血が絶えるまで努力したい。この辛い世の中、正正堂堂と「友愛」を求める者は、多分、最初から愚か者だろう。でも、この愚か者たちこそ、最後までやり遂げられる可能性があるとは私は信じている。

i VTB : VTUBER(Virtual Youtuber)ネットでバーチャルのイメージを使って内容を創作する作者

ii 共産趣味者：共産主義に対して興味を持ち、賛成するんですが、政治活動をしない人

私にとって友愛とは

張夢晗（3年生）

社会の発展とともに、世界各国の人々は人類運命共同体の構築を後押しし、手を携えてより素晴らしい世界を建設するというコンセンサスを得た。それぞれの文化を持つ各国・各民族の人々のコミュニケーションが盛んになっており、互いの文化的違いや価値を受け入れ、尊重し、そして新たな関係性を創造することを目指している現在、「友愛」の考え方は既に重要な意味を持つようになったと言える。

では、「友愛」とは一体何だろうか？ この一見簡単そうな単語をどのように理解していくのか？ 鳩山先生の講演をきっかけに、私は初めてこの重要で深刻な問題について深く考えていた。また、友愛精神の欠如についてもつくづく感じた。「友愛」の意味について、鳩山先生が仰ったことは心に染み込んできた。

「それぞれの自分自身に対して自信を持ち、自分と違うものに対しても、尊敬を持って認めていく、そして助け合う。」「私たちは違う

ね。でも、その違いも素敵だね。」このような話を聞いたとき、私は非常に感動した。去年日本で一年間の交換留学生生活を繰り返しながら、私は「違い」を尊敬する必要を身にしみて感じた。国際寮で住んでいた留学生たちは、それぞれの生まれ育った文化によって違う考え方や習慣を持っており、コミュニケーションの際にはズレが多かった。しかし、他の留学生と接しながら相手の文化に触れつつ、相手に自国の文化についても詳しく説明し、互いに文化を理解しながら、親しい関係を結んできた。こうして「友愛」の精神を持ち、傲慢と偏見を捨て、異なる文化の交流・対話や調和的な共生を推進することはコミュニケーションにおいて最も重要な第一歩なのではないか。

しかし、鳩山先生が仰ったとおり、友愛の精神が欠如している人や国が少なくないと言える。現在、世界の経済状況は大変厳しい状況下に置かれ、一部の国家は友愛の精神に違反し、覇権主義を唱えている。著しいことにそれは世界中の人々に認められていない。こういう状況であるこそ、鳩山先生が提唱する友愛精神の大切さが明らかになる。友愛精神がない国は果たして平和を生み出すことができず、友好関係を構築することもできない。「友愛とは自立と共存だ」といったように、自国の発展が生気に満ちるようにするだけでなく、他国の発展のために条件をつくり、世界の文明の「花園」で花々が競って咲き誇るようにさせなければならない。

「友愛」は一見簡単そうな単語であるが、実際は人と人、そして国と国の上にコミュニケーションの橋渡しとして役割を果たすのだ。国際情勢の不安定性と不確実性がより際立っている現在、人類が直面している国際的な試練は一層深刻になっており、世界各国が心を一つに力を合わせ、共同で立ち向かうことが大事だと考える。友愛の理念を堅持するからこそ、人類運命共同体を構築し、共同繁栄の未来を切り開くことができる。よって、友愛の精神をどんどん受け継いでいき、引き続き人類文明に新たな輝かしい一ページを書き綴るよう努力すべきだと考える。

私にとって友愛とは

姜昊越（3年生）

鳩山由紀夫先生の友愛についての講演を聞いたことをきっかけに、一体友愛とは何かを改めて考えてみた。「大辞林」では、兄弟または友人の情愛、あるいは友情を抱えていることと説明している。確かに、小さい頃から仲間には優しく、と教えられて成長してきた私たちにとって、友愛というのはよく耳にする言葉だが、仲間に優しくすること、本当にそれだけでよいのだろうかと鳩山先生の講演を聞きながらふと考え始めた。

まずは、友愛の対象についてだ。友愛と聞いたら、主に友人に対する態度だと思う人が多いはずだ。見知らぬ人は自分とは無関係で、邪魔されないかぎり、どうでもいいとして目の前の困った人を無視するのはよく見られる光景だ。しかし、人間は社会の中に存在しており、他人と繋がりを持つことは人生という長い道のりの中で、避けられないことではないだろうか。その中で、出会った人や、見知らぬ人、皆んなにできるだけ善意を持ち、友愛精神を広げていくべきだと、私は思う。

また、その対象は人間以外の、国や自然などにも及ぶ。鳩山先生の言及された植林活動は、私たちの依存している地球にその友愛精神を持って実施している一例だと思う。今や、科学技術が発達したことにより、人間が自然を利用することがある程度可能となった。しかしその一方で、人間は自身の欲望のままに、自然を無闇に破壊し続け、その姿はまるで子供のように、自分勝手だとも言える。このまま自然を破壊し続けたその先に一体何があるのだろうか。そこで、友愛の精神を地球にも、という考えに私は至った。

では、そもそも、友愛の精神とは何なのか。鳩山先生の話によると、友愛とはお互いを尊重し、理解すること、または自立と共生だという。みんなが違うというのが事実であり、そして、その違うところがまた

素敵だったりするという、鳩山先生の言葉に私は、共感した。自分と習慣や考え方などが異なる者に対して、手を差し伸べ、「和」を大切にすることが友愛だ。それは他人に対する友愛だけでなく、どこかで他人と違った自分に対する友愛だともいえる。これは異なる国の間でも同じことが言えるだろう。

今、まだ大学生の私だが、その友愛を生活の中で実現したいと思い始めている。微力ながら、中日の違いを身の回りの人に少しずつ示し、彼等にその違いに隠れた「綺麗さ」に気づいてもらうことで、多少なりとも偏見を無くし、結果として、友愛の精神で中日友好の架け橋になればと、私は強く感じている。

友愛で夢の社会を作ろう

陶逸朋（2年生）

僕の専門は日本語と英語だからこそ、東西文化の角度から自分が生きている社会への特別な考えを持つがあるだろう。僕だけでなく、全人類は誰でも「必ず平和な社会を作りたい」と思っている。やり方はさまざまあるが、目的は同じだ。

中国には、古来「大同社会」という言葉が存在している。いわゆる「大同社会」は中国伝統思想において社会の最高の階段だと思う。西洋文化における「エデンの園」というモデル社会と同じように、平和で繁栄な社会を作ることを目指す。この概念は鳩山由紀夫氏が提出したモデル社会もほぼ同じだと思う。

ところが、僕は講演会の前の一つの問題を考えている。つまり、みんな同じく働いて等量なお金を得ると、労力を多く費やす人と労力を少なく費やす人の区別は具体的にどこから表せるのだろうか。例えば、若い人たちがたくさん労力を費やせている一方、高齢者たちは体力の原因で同量の労力が貢献できない。もし両方は等量なお金を得ると、社会的な矛盾が生まれるのではないだろうか。その矛盾が

いかに解決できるか。僕は講演会の前にずっと疑問に思っていたが、講演会のおかげで、鳩山由紀夫氏と川手正一郎氏が提出した友愛の概念によってその問題をちゃんと解決した。川手正一郎氏が幸せな生活になりたいと微笑みと感謝する気持ちが必要だと言ったが、その微笑みと感謝する気持ちは友愛の核心ではないだろうか。みんな毎日微笑みをしながら感謝する気持ちをもって他人に「ありがとう」と話したら、平和な生活が永遠に続けるということが僕は信じている。

もしも、鳩山由紀夫氏が言った友愛大学が本当に存在すればその大学の最高の学部は社会学部ではないだろうか。そうすれば（ならば）、僕は今からその大学の社会学部を目指して努力していきたい。たとえば友愛大学の理想、つまり「鳩山由紀夫氏が言った社会モデル」はただ夢だと非難されても、全力を尽くしてその夢の社会を作るべきだと思います。

今の世界は不安定な世界だ。世界の各地は戦争、病気、そして差別など、さまざまな問題がまだ解決できない。それこそ、外国語を勉強している大学生の僕たちに、社会的責任を求められている。毎日微笑みをして感謝する気持ちをもって周囲の人々と友愛で生きていることも平和な世界を作ることに對して大事な貢献ではないかと僕が思っている。そのため、川手正一郎氏が言った通り、未来には自分が元気、やる気、本気そして勇気をもって目指している夢の世界を作ろう。

私にとって友愛とは

王紫菡（2年生）

友愛とは、いったいどういう意味ですか？ 周りの人をよく手伝って、仲良くすることだけか？ 先日、鳩山由紀夫先生の講演を聞いて、友愛の精神についての資料を探して、この言葉をもっと深く理解

しました。機関紙「友愛」の文章「友愛の理念を大きく育てよう」を読んで、相互尊重・相互理解・相互扶持の友愛の精神をわかりました。それは、論語の「仁」、「愛」と述べる精神にも共通していると思います。

愛することは、アイスクリームのような空想ではありません。「友愛」は実践できる哲学です。植樹活動などの環境保護行動は、人類と自然の友愛です。貧しい国に対する支援などの利他行為は、国と国の間の友愛です。

また、習近平主席2013年には提唱した「一帯一路」構想が、着実に実績を上げています。「一帯一路」は鉄道や道路などのインフラ整備の経済合作の活動にとどまらず、さらに文化が大いに交流し、相互促進を深めるプラットフォームです。その中、わたしたちはずっと「友愛」と同じな理念を持っています。「人類運命共同体」の構築は本国の発展を求めて、さらにアフリカ、中南米へと共通の利益を広がっている。

北京語言大学の学生にとって、「友愛」をためにできることは多いです。例えば、私たち日本語専攻の学生に、一番重要なことは日本語の勉強です。ここで、私たちは日本留学生と交流して、両国の文化、風俗、社会、価値観などの共通点と差異をみつけできる。相手の異なる部分を尊重して、共通認識を探しあうことも友愛の肝要な理念だと思います。そして、両国の青年は偏見を捨てて相互理解できるとなれば、中日関係ももっと友好になると思います。友愛の心で身近なことを大事にするのは必要です。

偉大な歴史事件は、すべて空想から始まって、現実で終わりの…一つのアイディアは、空想にとどまるか現実になるかは、それを信じる人の数と実行力にかかっている。「友愛」を信じて、友愛の理念を大きく育てるために、鳩山由紀夫先生は今までの努力が私に深く感動した。われわれ青年は友愛の精神をし、友愛と平和の世界を目指すべきです。



左のu(ユー)と右のi(アイ)でユーアイ(友愛)です。これは英語のユー(You あなた)と(I 私)に通じ、全体の形は、We(私たち)のwでありWorld(世界)のwです。

あなたと私、私たちが友愛の世界を目指しましょう！

一般財団法人 友 愛

<http://yuai-love.com>